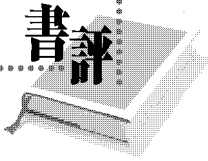


書評



宮岡 等 編著

「精神科 必須薬を探る」

田辺 英

精神科臨床で最初に覚えるべき薬は何か。研修医に質問されて返答に困ったことがある。少ないと十分ではないし、多すぎても使いこなせない。特にここ数年新しい向精神薬が登場し、治療の選択肢が増えた。臨床の幅が広がったのは確かだが、従来薬との使い分けなどは議論の最中と聞く。誰か膨大な情報を整理してくださらないか。そう思っていたところに必須薬という切り口で、精神科治療のエッセンスを1冊にした本が出版された。

題名の「探る」という言葉が、本書の性格をよく表している。まず、必須薬の条件が吟味される。それから具体的な薬が提案される。筆者らと必須薬を探っていくうちに、「本当に必要な向精神薬」とは何かを一緒に考えさせられる構成になっている。

必須薬に求められる条件とは何か。強力なエビデンスが得られた薬、ガイドラインで勧められている薬、自家薬籠中の薬。どれも甲乙つけがたい。エビデンスの厚みで選んだら文句はつけにくい。しかし、編者の宮岡も指摘するように、エビデンスだけに頼ると、研究資金が豊富な製品に偏ってしまう危険もある。逆に、「エビデンス」も不足し、ガイドラインから見放されているが、落とすには惜しい薬もあるだろう。

そのジレンマを克服するためであろう、筆者らは臨床経験から得られた意見も取り入れて記述している。もちろん、広範囲にわたる文献を考察した上でのことである。エビデンスやガイドラインを消化しつつ、臨床現場に即した論述は、同時に精神科治療のバランスのとれた要約

にもなっている。

「必須薬は何か」という議論は、精神医学に新たな視点を加えることになるだろう。何かを選ぶには、何かを捨てなくてはならない。薬を絞り込むときには判断基準(1つではないだろう)を明確にする必要がある。その明確化の過程は、精神科治療の暗黙の前提を洗いなおす作業にもなると思うのである。

本書は、5部構成からなる。疾患別の必須薬を扱う章では、統合失調症やうつ病と並んでせん妄や睡眠薬も取り上げられている。また、向精神薬の副作用治療薬にも独立した章が与えられており、パーキンソン症状や便秘、起立性低血圧がトピックになっている。

最終章では、新臨床研修医制度での必須薬が論じられる。個人的感想だが、この10ページ余の記述に本書の持ち味が良く出ていると思う。短期間の研修で消化不良を避けるため、濃淡をどのように付けるか。頷くことしきりであった。

新しい臨床研修医制度では精神科が必須になった。精神医学の正確な知識は専門家以外からも渴望されている。本書のような精神医学の最新の考えを言語化する努力は、精神医学にとどまらず我が国の医療全体にとっても意義が大きいのではないかな。

ここ数年の精神医学の大きな変化を俯瞰したい方にもぜひお薦めしたい1冊である。

(財団法人神経研究所附属晴和病院)

● A5判 240頁 2004 定価3,990円(本体3,800円+税) 中外医学社